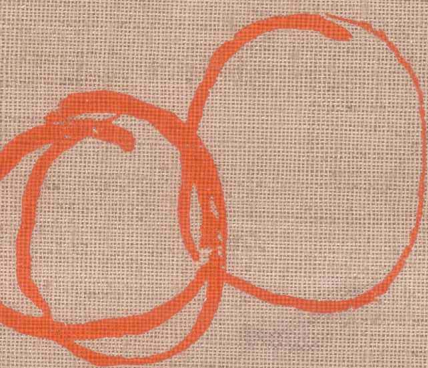


高見順全集



高見順全集

第一卷

勁草書房刊

高見順全集 第一卷

昭和四十五年十二月二十五日發行  
昭和四十九年二月二十日發行（二回）

著 者 高 見 順

發 行 者 井 村 壽 二

印 刷 者 山 田 博

發 行 所 勁 草 書 房

東京都文京區後樂二―二三―一五  
電話東京八一四（六八六一）  
振替東京一七五二五三  
© 高 見 順 一九七四  
〇三九三―八三二一〇―一八三六

\* 本書の定價は外面に表示してあります。

高見順全集 第一卷

編纂委員

川端康成

伊藤整

澁川驍

平野謙

中村眞一郎

小田切進

目次

故舊忘れ得べき

如何なる星の下に

胸より胸に

解説 本多秋五

解題



故舊忘れ得べき





## 第一節

そろそろ頭髮をからねばならぬと思ひついでから半月経ち、かうボサボサに成つてはどうしても今夜こそはと固い決心をしてからでも、尙三日ばかり経つて漸くのことで、躑躅の盆栽を澤山並べたその理髮店の敷居を小關は跨ぎ得た。こは小

Should auld acquaintance be forgot,  
And never brought to min,?  
Should auld acquaintance be forgot,  
And auld lang syne?

Robert Burns

關にははじめての店で、郊外の町並が切れかかつた外れにある、餘りはやらない理髮店らしい貧相な内部の様子に、小關は眼を配り、安堵の溜息といつしよに、病氣をしたので汚い頭に手をやつた。不精髻をはやした店主は小關が店にはいつた時、いらつしやいともなんとも挨拶しなかつたが、この小關の辯解を耳にしても、別段、はアさうですかとも言はず、小關にはそれが小關のウンを咎める沈黙のやうにとれ、瞬間顔をハッと赤くし、赤く成つた自分の顔を鏡の中に見ると、小關は一層ドギマギし、椅子に墮いたりした。やはり無言の儘、客の頭に櫛を入れた中老の床屋の顔を、鏡を通してチヨロチヨロとうかがひながら、理髮代位儉約なさらんでもとか、ボウボウにのばした方は大概病氣を口實になさるのが手とか、そのしぼんだいやらしい口許から今にも毒舌が出てきさうでドキドキした。その機先を制するやうなつもりで小關は、オール・バックにして下さいと言つた。床屋は、え？と言つてその耳を小關の顔に近付け、小關はギョッとしたが、すぐこのしなびた床屋が耳の遠いことを諒解し、すっかり安心して身體も寛いだ。

小關は元來吝嗇の性質には相違なかつたけれど、強ち、床屋錢までケチケチしてゐた譯ではないのは、四十錢のところをいつも五十錢銀貨を出し釣りを受取らないで歸るところによつて分る。然しこれは彼の虚榮心のせいで、内心は十錢損

したと悔み、あの十錢にもう十錢ばかりたして岩波文庫の一冊も買つた方が遙かに有益であつたと考へてゐたかも知れぬけれど、髪が蓬々になる迄理髪店に行かぬといふのはこれは決して吝嗇の爲ではなく、何事によれ不精な性質のひとつのあらはれに過ぎない。不精の裏に、それに劣らぬ神經質がつついてゐるのが、時々はげしい自己嫌惡に陥らせる程の始末の悪い人間に小關をしてゐた。氣がついた時は、既に髪がひどく延びてゐて、床屋に行くのがどうも恥づかし、明日こそと思ひながらずると日が経ちだんだん床屋に行くのが怖くなる状態に追ひやられ、どうにも仕方なくなつてから眼をつぶり生唾を呑み込む勢ひで、前のと違つた新規の店へ飛び込むのである。随分のびましたねと顔見知りの床屋から言はれるのが嫌で、新規の店ばかりを選んではいり、病氣のためと誤魔化した。

さう言つて眞赤に成つた顔を瘦せた手でつるりと撫でおろす小關の胸は、事實、病みあがりのやうに動悸が全く激しく、それを小關から語られた友人は、そいつは立派な心悸亢進症だと言ひ、言はれた當座は小關は誰彼の區別なく、自慢さうに吹聴してニヤリニヤリし、聞き手も小關同様それがどうした病氣か知らず、致命的な疾患の名にはいつてゐないからいづれは頓聞な故障だらう位に、微笑をもつて聞き流してゐた。妻の豊美には友人と同じく誇りげに、俺は心悸亢進症だよ、

文明人の權るやまひだと言つてゐたが、流石に、彼とよく似た苦勞性の母親には黙つてゐたのに、豊美が話してしまつたらしく、大變なやまひに取りつかれたやうな憂ひ顔を見せはじめ、それが逆に彼に響いて、仲々心もとなく成つてくる仕儀に立至つた。折よくそこへそれは輕微の神經衰弱であると言つてくれる友人があらはれ、彼と同じ勤め先のその友人は小動物的な小さくよく動く眼を狡猾げに四圍に配つて、こんな所にゐたのでは誰だつて神經衰弱に成りますよと言ひ、その英語雜誌の出版社の惡口を小聲ながらとげとげしい調子でしやべり出した。

小關は大學の英文科を出て、同窓がそれぞれ相應な職業に就いたなかで、彼ひとり勤め口がなく、親戚の中學の英語教師の紹介でどうやらこの出版社にもぐりこんだ。はいつた當座三年ばかりはそこから出てゐる英語雜誌の編輯の手傳ひをしてゐたが、社内に英和辭書編集部が新しく出來るとその方へ廻され、その臨時雇に來て小關と机を並べたのが、この友人であつた。多分過勞のためだらうが、顔色が極めて悪く、艶がなく、案外に大柄でガッシリした身體の割に大變小さいその顔は額が狭く、絶えずそこに數條の皺を浮べてゐるなど、どう見ても社會の下積みで終始するらしい人相の同僚は、小關の神經衰弱を出版社のせゐにしてぐどくと社主の惡辣さや貪婪ぶりをこきおろしたが、もともとその男が好きでない

小關は表面ではふんふんと頷いてゐたけれど、肚の中ではまるでソッポを向いてゐた。私立大學の英文科を出たその男は夜學の先生を二校ばかり掛持ちでやつてゐて、ここでは晝間の四時間、一月三十圓の手當で働いてゐるのだが、夜の授業のためここで精力を使ふのを惜しんでか、もともと狡い性質のためか、部長がゐないと居睡りをし、居ても頗るのろのろと仕事をし、それが小關には妙に癪であつた。臨時雇であるため、仕事がなくなると餓である。辭書の完成が一日でも遅れるだけ、彼には得な譯である。そのため、仕事をサボつてゐるやうに小關には見え、その汚い根性に腹が立つてならなかつた。これは餘り穿ち過ぎてゐると小關は思ひ、自分も亦この男と同様社主に搾取されてゐる仲間であるのに、そして學生時分には學内の左翼組織の一員であつた自分がこれはなんとしたことだらうと反省し、却つて自己嫌惡に襲はれる時もあるけれど、さりとてその男を好きになることはできなかった。三十圓のはした金とその男は言ふが、自分は一月働いて六十圓だ。細い仕事のため眼が疲れ、夜は新聞を読むのさへ大儀な位、自分はその六十圓で一心に働いてゐる。夜學は愚か、安い翻譯の内職すらできない自分はなんといふ馬鹿正直な男だらう。さう思ひつくと、要領のいいその同僚に腹が立つて仕方がないのは、自分の愚直に對する忿懣を彼に轉嫁してゐるのだと判明し、癪に障るのは他でもない、その男

のやうな眞似のできない、己れの愚圖さ加減に自ら怒るためであらうと納得しても、それでも矢張り小關はその男に親しめず、それには一種生理的な、理窟で拂い難い根があつた。——額に手をやり、右手はちやんとペン軸を握り、仕事をし、小關はいらいらして來て、わざと大きな咳をしたり、椅子をガタガタいさせて便所に立つたり、嫉妬めいたものが胸にたぎつてどうしても邪魔をせずにはゐられなかつた。隣りでは一枚の原稿がまだ出來上らないのに、こつちは既に三枚も書き上げたりすると、小關は陰險な横目を使ひながら、部長にきこえよがしに、さうして三枚上つたぞと言ひ、大變能率の上つた事實とは反對に、今日はいつともより遅いからすこし馬力をかけんといかんわいなどと嫌味を言つても、隣りの男は表情ひとつ崩さず泰然と構へ込んでゐて、小關は胸のなかがへんな憎しみで煮えくりかへるやうな有様なのだつた。

それは兎も角、彼が神經衰弱であらうと言つてくれたその言葉は小關に少なからぬ安堵を與へた。しかし、もとより快く思つてない同僚の言であつてみれば、さうでせう、きつと——心悸亢進ナンテどえらい病氣であつて堪るもんですかと、肚の中では盛んに相槌を打ちながら、それを表に出すのは業腹であつたから、ほほうといふやうな顔を小關は裝つてゐた。氣の弱い小關はどんな人間にでもなんらかの點でひけ目を感

じ、一目置くのが常であるのに、この男に對しては、かうも強く出られ、自分を守るのを小關は顧みて氣味が惡かつた。

そしてその神經衰弱だが、さきに心悸亢進症と言はれた場合とおなじく、しばらくは、あたかも時候の挨拶でもあるかの様に、他人の顔さへみるとすぐに、僕は最近神經衰弱で弱つてます、神經衰弱でね！と樂しさうに吹聴してゐた。

そしてだんだんと心配に成つてきた。俺はほんとに神經衰弱かも知れんぞ！さう思ひ出すと、彼は前のやうにうれしさうなニコニコ顔で自分の神經衰弱を宣傳しなくなり、逆に人から、その後神經衰弱の方はどうですなと問はれたりすると、大層ドギマギし、もうなほりました、あれは單に氣のせゐたつたのですよと否定の言葉を強めるのであつたが、その取り亂した有様は相手に病氣の惡化を感じさせるのに役立つだけだつた。表面では、それは結構と言ひながら、肚のなかでは、小關も氣の毒に大分ひどく成つてゐると同情する、その相手の心が小關には明瞭に讀み取れ、その同情に對する腹立ちが胸を衝くと同時に、暗澹たるものが頭に立ち置めて來、彼は見事にあわて出した。翌朝、小關は神經衰弱の藥の廣告を朝刊で見ると、ハツとして眼を近づけた。患者は注意が散漫になり、一定の觀念を追つて思索をつづけることが不可能になり、讀書の際一貫して要領を掴みこれを銘記することが困難になると廣告は言つてゐる。彼は溜息をつき、逆もいやな顔

をして空を睨んだ。彼が今まで取つてゐた「改造」をやめ「オール讀物」に變へてからもう二月になるが、それは學生時代のやうに「思索をつづけることが不可能」になつたからであつた。「改造」の固い文字は彼に面白くないだけでなく、事實わからなくなつて來たのである。學生の時のやうに食ひ讀む熱意はちつともなく、無理して讀んで行つても、徒らに眼をさらしてゐるだけで、「一貫して要領を掴む」ことが出來ず、あゝあといつて投げ出してはねばならなかつた。そこで軽い讀物と思ひ、幾分暗い氣持に襲はれながら雑誌を變へてみたが、この頃ではその軽い物すらあまり眼を通さぬ状態になつてゐた。新聞もまづ眼をもつてゆくところは漫畫で、ものの一分もたてば見終へるものを、時とすると三十分も一時間もニヤニヤと眺めてゐて、この男の鼻をもう少し高くし、チヨビ髭をつけると誰それに似てくる、このモダン・ガールは漫畫の癖にヘンに俺に魅力的である、スカートのほうが少し短いともつとエロなのだが惜しいもんだ、腰は一體どの邊かな、俺もこんな女と一生に一度戀愛をしたいものだ、かういふ女はオゼキサンと鼻にかかつた發音をするだらう、そして減茶に甘えることであらう、ところでこのモダン・ボーイだが、チョッ、氣障な恰好をしてやがら、こいつの聲は、歩き方は……等々とそれからそれへと妄想はのびて行つて飽くことをしらぬ。ひとりでニヤリニヤリしてゐるその有様に、

妻の豊美がたまりかねて彼の手から新聞を取り上げねばいつまで續くか際限がない状態だ。つまりは、頭がヘンになり腐つてゐる證據だらうと反省するが、さりとて雑誌の論文はおろか、新聞の讀物でもちよつとこみいつたものは、氣が散つて一向に頭にはいつてこないから、却つて頭のだめなのを見せつけられる様で怖ろしく中途で投げ出す譯なのだった。

——もはや立派に神經衰弱だ。小關はさう力み返つて側の新聞紙を横目で睨んでゐると、豊美が、早くなさらないと遅刻してよと肩に手をかけた。彼は黙つて立ち上り、俺は病氣だと呟いたが、茶の間の柱時計に眼をやりその長針がすでに十五分過ぎてゐるのを見ると、さア大變と飛び上つて叫んだ。社は八時出勤で、郊外の家から牛込の社まで四十分は充分かつた。それネクタイ、それ靴下と豊美をどなる聲が一しきりした後、あたふたと家を飛び出し、首を前に突き出してセカセカと歩いてゆく小關の姿は安月給取り丸出しである。

その晝、この哀れな安月給取りは社の近所のメシ屋へ例の嫌ひな同僚と一緒に晝飯を食ひに行つた。定食二十錢也を二人は食ひ、烏賊と里芋の甘煮のおかずは小關の、いつてみれば嫌ひな種類のものではあつたにも拘らず、傍の同僚がまづい食へないと眉を顰めたので、それに對する反撥から残さず食へることができ、食べればさう口に出して言ふ程まづいおかずとも思へなかつた。隣りはおかずを丸残しにしたまま箸を

置き、それを見ると彼は妙にいらいらして一種ヤケな感じで、新香の澤庵も残さず全部平らげた。安食堂だけにメシの盛りがよく、朝から机に嚙り附いたままの身體ではすこし量が多かつたけれど、無理に食ひ、さすがに胸につかへた爲もあらうが、彼は不愉快な顔をしてメシ屋を出た。少し遅れて歩いてゐた同僚は、まづくて食へんと思ひ出したやうに舌打ちをし、それが小關の不快をいよいよ驅り立てるとも氣付かぬ顔を小關は顧みながら、安いからまづいのは仕方ない、そんなにブウブウ言ふなら高い所でたべたらよからう(家でどんな贅澤をしてゐるのか知らないが、まづいまづいとさう大口を叩ける柄でもなからう——と、これは肚の中でだが)危く言ひさうなところだつたが、グツとこらへた。餘り大人氣ないと思はれ同時にこちらで獨り勝手に腹を立ててゐるのだからと省ると滑稽で醜態だとすぐ氣付き得たからである。過勞で顔を蒼くしてゐるその男にしてみれば、積み重つた疲れのため食慾が振はず、なにを食べてもうまくない、それで自ら腹が立ち、おかずに當り散らして僅かに慰めてゐるのかもしれない。そして小關は生來貪慾で食ひしん棒であり、食はねば損だといふ吝嗇な根性からなんでも詰め込むのかもしれないが、それを自ら氣付かぬ儘に、その意地穢さを隠さうとする本能的なものが逆に恬淡たる他人の動きを非難させる事情であるかも知れないのである。兎も角、小關は不機嫌な顔をし

て、同僚と別れて堀ばたに出たが、道の小石を蹴りながら、かう腹が立つのも神経衰弱の故かもしれないと憂鬱であつた。堀の土手には色鮮かな青草が生ひ繁り、彼はしやがんでその柔い葉をむしつてゐるうち心が次第になごやかにつた。水の上を渡つてくる爽やかな風が瘦せた彼の頬を撫でながら、この日頃絶えてなかつた夢想的なときめきを彼の心のなかに靜かに吹き込んで行き、彼は面をあげて空を仰いだ。空は青く澄んでゐて、夏に近いキラキラした光りが彼の眼に滲み、その刺戟で氣付かぬうちに出了た涙が鼻翼を傳はつて流れてゐた。手の甲でそれを拭ひながら、ほんの一瞬前までは、それはと楽しく夢想的であつた心が忽ち佻しく曇つて了つてゐるのに氣付き、ほんとに泣いてゐるやうな恰好であり氣持であつた。希望があつてこそ夢想は楽しい。しかし彼の現在には何の夢があり希望があらうか。しがない勤めに味氣ない家庭。何を目當てに一體生きてゐるのだらう。なんのための生活か。さう思ふと、今はとめどなく涙も出て來てしまふのである。——樂しかつたのは學生時代だけである。あの時分には夢があつた。そして彼は過ぎ去つた日のことをいろいろと思ひ浮べてゐるうちにある事を不意に思ひ出し眼が急に輝いて來て、さうだ、俺は神経衰弱ではないぞと言つた。同時に晝休みの時間が既に過ぎてゐるのに氣付き、土手の砂利道をあたふたと駆け出して行つた。

——高等學校の寄宿寮の食堂である。食堂のまはりには屋根を蔽はんばかりに廣闊な葉を擡げた大きな梧桐が生えてゐて、陽の鮮かな夏日の眞晝などは、曇り硝子を通して堂内の空氣まで氣持のいい綠に染めてゐた。小關はそれを今でもはつきり記憶してゐる。食事開始の鐘がなると、寮生は砂煙をあげてその食堂に雪崩れ込むのが常であつたが、小關は故意に遅れて行く場合が多かつた。彼はその瘦せた身體の一體どこにはいるのかと疑はれるくらい大飯食らひで、その癖、食ふのが遅く、誰より早く駆けつけても席を立つのは一番遅い有様であつた。痩せてゐる癖にメシは人の二倍を食ふ、否大食をするんで肥れないんだと罵られる若者が、どの寮にも一人か二人ゐて、彼等のうちには飯鉢を側にひきよせて、悠然と食つてゐる神經の太いのもゐたが、お前はそんなに餓鬼みたいに食つても消化しないでメシはその儘クソになつてしまふんだらう、百姓には困つたもんだ、といった無遠慮な毒舌を平然と聞き流してゐる、さうした豪膽な眞似は小關には到底できなかつた。従つて彼は遅く席に就き、周囲への遠慮なしに獨りでのうのうと大飯を樂しむ習慣になり、何かの都合でそれがかなはず、同室の者と共々卓を圍まねばならぬ場合は、急いでカッこまうとしてももの言はずに、實際眼を白黒させて食ふのであるが、その意地の穢い醜態さはさぞや周囲の顰蹙を買つてゐたらうと、後年小關は思ひだすたびに汗を

催すのである。これは全く汚い貧乏人根性丸出しなのに、虚榮の強い小關は自分が貧乏であるといふことを寮生仲間から隠すことに全身の神経を使つてゐた。たとへば、彼が皆の眼をのがれて大飯を食ふといふのは、生來の貪慾のためもあるが、ひとつは一時にうんと食つておいて、あとを儉約しようといふ肚もあつたからで、缺食の屈出をして置くこととあつてその分の拂戻しがあつた。この食費の拂戻しで小關は同室の者にコーヒーとか焼鳥などを奢りいかにも豪遊をするやうな風を装ひ、自分はかなり裕福であるといつた顔をした。彼の秘密の節約をはじめ知らなかつた寮生達は、いつも部屋隅にこつそりひそんでゐて、部屋をあげての放蕩の誘ひにも聞いときかない風をしてついでに小關が、逆に奢るからとニコニコするのを氣味悪く感じながら、偏屈豚兒がどうした風の吹き廻しかとワイワイ騒ぎながら街にでた。豚兒といふのは健兒といふ小關の名を振つた蔭の渾名で、學生のニック・ネームは公然の呼稱であるのが普通だけれど、他の學生のやうにあげつばなしな所がなく、みんなに溶け合はず妙に秘密の翳を持つた陰性の小關だけは、みなも敬遠して蔭でしか豚兒と言はなかつた。ところで豚兒の秘密はやがて皆の知るところと成り、それに氣付かぬ彼は相變らず皆に誘ひをかけたが、皆は眼を見合せて躊躇し、多少嗜虐的なところのあるトム（友成達雄の友からきた渾名）だけが行かうと言つた。

どうせ奢るならビールにしろとトムは高壓的に出、なにやかや口實を設けていやがる小關の腕を取つてカフェーにはいり、平生は頑なくらゐ無口の癖にいつもかういふ場合はペラペラとまくし立てずにはおかぬ小關が、すつかり黙りこくつて項垂れてしまつたのは、財布の中が心配で、虚榮心を満足させるための折角の享樂が今では苦痛と化した爲であつたらう。しかし脂汗がじりじりと滲み出たほどの小關の憂慮にも拘らず勘定はトムがあつさり拂ひ、さうなると、小關の今まで硬直してゐた顔の筋肉が途端に弛み、まるで飲んでゐないのにその頬にサツと酔ひの赤味さへさして來、店を出るなり、トムの肩に手をやつてコリヤコリヤと叫んだ。先刻の屈辱感もなんのその、カフェーといふところへ行つて來た以上は、酔はねば損、酔つてなくとも酔拂ひの眞似をしないではウソだといつたみたいで、ヘンな千鳥足をしてはしやいである小關を見ると、友成は多少憂鬱になつた。寮に歸り小關は、さも自分が奢つたやうな顔で、友成君（小關のことをみなは渾名で呼ばぬかはりに、小關もみんなの渾名を使はなかつた）と大聲で言ひ、富士見軒の智恵ちゃんはいい女だなと言つた。扱て、筆者は思はず脱線をしてつたが、讀者にもう一度、例の寮生の食堂にはいつて戴きたいと思ふ。食堂内には細長い食卓が何列も並べてあつて、食卓には十人にひとつ位の割で飯鉢が置いてあり、それはすぐ空になるので、給仕！メ



シ！と叫ぶ聲が各所で擧つてゐる。その他、箸をくれ、茶をくれ、新香をくれ等々の聲が囂々と渦巻き、食卓に密集してゐる寮生の間をその聲に應じて右往左往する給仕たちの板草履の音、慣れぬ讀者などはその騒然たる氣配に壓されて飯粒が咽喉を通らぬことであらうとおもふが、見ると、そのなかに小關がゐる。何か餘儀ない事情で、不本意ながら皆と食事をともにしなければならぬらしい彼は、周囲の喧囂など更に耳にはいらぬ態で、茶碗を口許近く持つて行つたまま一心不亂に食つてゐる。ひとつの食卓には四五部屋の寮生が一緒に向ひ合つて列んでゐるのであるからして、彼の隣りの空きは同室のものとは限らず、茶碗の側に置いてある木札の名は篠原辰也となつており、彼は一室置いて隣りの部屋のものである。篠原辰也は小關が大學に行つても深い交渉を持ち（通常、高等學校時分の交遊は大學に進むと、専攻科が違つたりする關係から一應切れるものである。）この小説に於いても後節で、小關と少々纏れた關係に入る人物故、ここで風貌性格等の紹介を省くこととするが、その彼がやがて食堂にその長軀をのつそりと現はした。彼は席にわり込むと、卓上のおかず、その描いたやうに美しく濃い眉をひそめて、「代菜」を頼んでおけばよかつた、雑多煮といふ奴はまづくて食へんと呟き、給仕！海苔くれ！と叫んだ。そして横柄な面構へであたりを見廻したが、彼がまづくて食へんといふ

おかずを既に大半平げてゐた隣りの小關は瞬間グツと肚にこたへるものがあつた。人蔘、馬鈴薯その他の野菜を豚肉と煮込んだ雑多煮といふ獻立は、ただ篠原にとどまらず一般寮生に頗る不評判で、代りのお菜、即ち「代菜」を申込む者が多く、但しそれは獻立發表の當日、つまり前日の夕刻迄に食堂宛届けておかないと、篠原の場合のやうに「代菜」の海苔を自分で買はなくてはならぬのが規定であつた。篠原は海苔で食事ははじめ、雑多煮には一箸もつけぬのを小關は横目で窺ひながら、一般の不評判にも拘らず自分にはうまくて仕樣がない彼は心安らかでなかつた。篠原の態度は己れへのあてつけのごとくに取れ、さう考へると食欲も頓に萎え、篠原の侮辱の眼に抗して食つて行くだけの強氣も小關は勿論持ち合さず、情なさうな顔付で箸を置いた。彼はそのまま席を立ち、まことに踴躍たる恰好で食堂を出て行き、出るとばつとはしり出した。食ひたりぬ不満、食残した未練、それから口惜しさ、悲しさ、腹立たしさ、いろいろなものがこんがらがつて彼の頭を締めつけた。——さきにある事と書いたのはこのいやな追憶に他ならなかつたのである。自分はいうまいと食べ、他人は食へないと言ふ。しかしそれがなんだらう。他人は他人、我は我ではないか、だのに、それに對してムカムカするといふのは、——これは神經衰弱のためだらうか。もしさうとすれば、己れは八年ほど前から神經衰弱であつた譯だが、